
聞きたい言葉

柚 雨深

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聞きたい言葉

【Nコード】

N7489H

【作者名】

柚 雨深

【あらすじ】

好きだった人が結婚した。自分はどうすればいいのか、悩み、そして・・・

完結

結婚式も披露宴も終わり、秀明とホテルが用意したタクシーで郊外の新居に向かう。市内中心部の結婚式場を出てから三十分程経過した頃、毎朝出勤途中に見慣れた救急病院の前を通過した。橋を渡り右折すると、二軒目のコンビ二の先が私の実家だ。明日からはこの交差点を左折し、秀明との生活が始まる新居に帰る。

夜空に煙を吐く工場の煙突を眺め車に揺られて居ると、スーパーの駐車場が見える。駐車場の奥、二階建てアパートが二人の新居だ。時間は午後十一時を過ぎている。

「疲れた・・・」

そう呟き静かに息を吐く。

私、三十四歳。黒川秀明、三十八歳。今日からは黒川凜となる自分に、見えない不安を感じ疲れが増す。

昨日からの雨で部屋の湿度が不快に感じる。先日荷物の整理に來た時の洗濯物、部屋乾しの匂いもある。明かりを灯すと殆ど荷物の整理が終わった生活感の無い部屋で、白いソファが暗く混濁した色に光る。この部屋に入居する時、彼の職場で購入した二人掛けのソファ。秀明にも疲労の色が窺え、彼の声も感情薄く聞こえた。

「疲れた？」

「うん」

絨毯の上に膝を崩し、タバコに火を着ける。今日結婚式を挙げた新婦とは思えない覇気に欠けた、慈しみが感じられない返事をする自分に、嫌気を起こす。愛情表現の欠如した私の受け答え、秀明はどう感じたのか。何故、秀明の顔も見ないのか。心にだるい感覚を持ち、自分の言動に苛立ちを覚えた。「秀明は今、私をどう思っている居るのだろう」と、考える。健康の為にタバコを吸わない秀明に対して、ではどうして私にタバコを止めると言わないのか、不満がある。「早死にしてもいいの」と、それはある筈も無いが、喫煙

だけでここまで飛躍し、性格の悪い子供の様になる。

秀明とは、結婚した今でもまだ本当に打ち解けて話しを出来ないで居る。

披露宴が終わってから着ているアコーディオンプリーツのワンピース。

普段なら直ぐ皺が気になるのに、今は気にもならない。「地味、落ち着き過ぎ、花嫁の衣装ではなかった」そう心に浮かぶと、秀明の事を気にせず、二本目のタバコに火を着けた。

袖はフレンチスリーブで上品。ハイウエストと裾の切り替えは薄いベージュのサテン生地を使って、カラーはブラックとベージュ。洗練されたデザインだが、どう見ても花嫁の華やかさは無い。

二次会ではゲストに見られて居たと思う。このシルバーのボレロも完全にミスマッチ。「田舎の姉ちゃん」、そんな雰囲気だ。

何故この服を着たのか、全ての予定が終了した今になり、我ながらショック。弓や美保、みんなはどう思っただけに見ていたのかと考えると自分のセンスの乏しさが悲しかった。

この次弓に会う時、何気なく確かめようと思ったが、「正直には言わないな」そう思い、秀明の嫌うタバコを吸う。

「凜、どうする」

「何」

「風呂」

私の返事を待つ様子も無く、秀明は風呂場入口の小さなスペースで服を脱ぎ始めた。聞く必要も無いのに、彼の感情の浅い声が何も言う事が無く、仕方なく声を掛けたと響く。今日結婚式を挙げた夫婦であれば、甘い言葉を囁き、肩でも抱いてくるかと思ったが、ホテルを出てこの場に座るまで、秀明はそんな気配すら見せない。交際期間が短く、余計に愛情に溢れる行動を取るのが普通と思えたが、違う様だ。「少しは期待して居るのに」そう思い、自分の予定が決まって居るかの如く、淡々と一人でシャワーに入る秀明の背中を見ると、急いで結婚はしたが、本当に私の結婚相手はこの人だったのか、間違いではないのかと考えた。

半年の交際を経て結婚に至った現在でも、今日まで一緒に入浴した事は無い。何故そうなのか理解出来なかったが、二人の関係には大切な事だとも感じて居る。私自身どうでも良い事と考える様に努力し、秀明の変化を待っているのだろうか。

秀明との出会いからまだ半年、まだまだこれからと自分に言い聞かせた。秀明の事をどう思い結婚に踏み切ったのか、疑問を残しながら、今日までの事を思い起こす。

結婚式も終わり、友達みんなから祝福は受けたが、本当にこれで良かったのかと不安になる。秀明と一緒に入浴しない事は理解出来ないが、何も特別理由など無いのかも知れない。秀明の部屋に泊まる時も、部屋の風呂が狭いという理由で二人一緒の入浴は無い。

秀明が私の実家に初めて来た時、秀明は父の目を盗み、私が手引きをして裏口から私の部屋へと入れた。それは、何故かその後も続いた。それ故風呂など入れる筈も無かった。シャワーさえも秀明は結婚が決まるまで私の実家で浴びた事が無い。浴びたいとも言わなかったし、私自身もあまり秀明を実家の風呂には入れたく無かった。

それが関係あるかと、考えた事もあった。

湯船まで一緒に入り、私にシャンプーまでした男が、秀明との結婚を決めた三ヶ月前まで居た事を秀明は知らない。

秀明と広い風呂が設置されているホテルに泊まる事もあったが、今日まで一緒に入浴する事は一度も無かった。この先、いくらでも変化する事でも、今の私には現実として見えない事が不安だった。

そう思うと、遠い昔の様に康太朗の事を思い出していた。

秀明と私は独身生活が長い為、自分の生活リズムを崩さない部分は互いに多い。結婚はしたが相手の生活の中に無神経に土足で入り、互いの習慣を押しつける様な交際を、秀明とは交際当初よりしていない。自分一人の時間を大切に作る気持ちは、秀明も私も多い。

私自身、特に気にする事も無く、今迄はそれで良いと考えていたが、本当はどこかで、これではいつか壊れる、そんな気持ちもある。直ぐに秀明から「一緒に入ろう」と、誘われると考えていたが、そ

うでは無かった。自分が入浴している時に不意に後から来るのでは、
と考える事もあったが、それも今のところ皆無。

誘いの声は、いつ掛かるのだろうか。結局はいつもと同じ時間が流れ、私は愛されているのかと、秀明に聞きたい。

今日も秀明が先にシャワーを浴びている。私からは入って行けない何かがある。

あの時、以来。

その事を思い出していた。トイレで用を足そうとしている秀明の後から個室に入り、用を足すのを待っていた。隠れて私の部屋に来ていた康太朗がトイレを使う時、父が来るのが心配で一緒に入った時の習慣で、何気なく同じ事をした。

「何、している・・・」

「凜、変」

と、初めて見る秀明の怪訝な顔。口に出さず、考えられないと目が語っている。何気ない行動だった。自分の結婚相手なのに、「ここに居てはだめなの」もう幾度も一緒に朝を迎えているのに。軽く冗談で笑い流してくれていれば、深く考える事も無かった。

しかし、結婚した今はどうでも良い事、この先何年か経てば介護するかも知れないと、自分の行動の正当性を探していた。秀明の声に出さず、余計に強く拒否した冷たい目を、私は思い出す。

あれ以来、全てに於いて私の行動が、どこかで止められている。

結婚式の翌日は休みを貰い、二日後から秀明も私も出勤した。式から直ぐで恥ずかしさもあったが、お祝いを言われる嬉しさもある。二人の仕事の都合で、旅行が先送りされた訳では無かった。式の日程を決める時に一悶着あり、燃油サーチャージの問題も突如発生し、旅先の選択に時間を要した。何よりオリンピックがある為、希望通りとは成らず、行先が決まったのは結婚式の二週間前だ。

確かに秀明の仕事は多忙だが、式場、日程、旅行と時間が無くなるにつれ、私は少し苛ついた。午後から半日の仕事をしている私が殆

どの下調べと、資料集めをした。「それなのに・・・」

結局、旅行は行き先を第一優先にした結果、結婚式から二ヶ月後、九月の初めと決まった。仕方無かった。

挙式も紆余曲折があったが、結局は私の希望通り、六月最後の日曜日と決まった。大安では無いが、私の三十四歳の誕生日。何とかジューンブライドセーフ。だが、私の希望が聞き入れられた訳では無く、周りの都合で仕方なく決着した結果だった。

そういえば、康太郎は「仏滅」と携帯のスケジュールに、私の結婚式を登録し、ご丁寧にアラームまでセットしたのを思い出した。

康太郎が仏滅と予定表に入力したのは、一週間前の大安と思い出した。康太郎には日程が一週間延びた事を、知らせずに終わった。

そう思うと、何故か寂しさが溢れた。「倉田康太郎、五十二歳」どうしてだろう、秀明と結婚した今でも寂しい気持ちは消せない。

実は黒川家の法事は随分前からその日（六月最後の日曜日）に予定されていた。秀明も実家から聞いて知っていた筈だった。しかし、私と日程の相談をした時、一言もその事には触れてない。

秀明の両親との相談は、秀明がはつきり話しをしないので、最後まで調整に時間が掛かった。決まった後も凝りが残った気持ちでいたのは私だけでは無く、秀明の母も、そう感じたに違い無かった。

式場は、私の希望のパイプオルガンのあるチャペルには決まらなかった。秀明の父親の都合で、どうしても結婚式場は市内でも大きなそのホテルと、秀明の両親に押し切られた。要は田舎意識で隣近所への世間体と見栄が理由だ。

私の結婚式へのささやかな憧れが、ここでも一つ崩れた。

結局、会場の決定遅れが最後まで全てに影響した。結納から挙式まで短期間の事もあり、式場の決定遅れが原因で、新婚旅行が挙式から二ヶ月後になった事は、私の秀明への不満として今でも残る。

私は何よりも式場を最優先に望んだが、最後は私が希望を言える雰囲気では無かった。パイプオルガンとチャペルに拘り、母校の後輩にコーラスまで依頼していた。しかし、本人達以外の都合で物事が

決まってしまう。「自分の結婚式なのに」そう思うと、自分の考えを強く主張せず、彼の両親に主導権を握らせた秀明を見て、この人は私を必要としているのかと考えた。彼もきつと私と同じなのだ。

最初から、愛だの恋だのという雰囲気は無く、出会った時からまず結婚ありきで、ゴールまでのプロセスをどう歩むかが、秀明の大きな課題だったのかも知れない。私も似た様なものだ。とにかく、「早く結婚したい」それしか頭に無かった。

結婚相談所も三ヶ所に登録し、秀明と会ったのも、その中の一ヶ所で、唯一登録料無料の比較的良心的な結婚紹介相談所だ。秀明も両親に急かされ、嫌々登録したと出会った頃告げた。嫌々登録した男と、結婚を焦る三十四歳の女が結婚するのかと心が晴れなかったが、それでも私は急いで結婚へと進んだ。

はつきりとしたプロポーズは思い浮かばない。秀明を愛しているのかと問われても、今は、何も言える気持ちには浮かばない。「不可も無く、可も無く」と言う感じた。私の抱える問題が、秀明に対する気持ちではなく、今の状況が結婚へと走らせた。

結婚相談所の紹介で知り合った私と秀明。三度目に会った時は暗黙の了解で、お互い結婚は決まったと思っていた。

私は秀明の他に、結婚相談所の紹介で五人の男性と並行して連絡を取っていた。秀明が私との婚約を決め、結婚相談所に私が支払う十二万円の成約脱退金を秀明が支払った後も、私は直ぐ全員に婚約成立の連絡はせず、暫くはメールの交換をしていた。成約脱退金を振り込んだ結婚相談所からは、その後紹介メールは来なかったが、残りの二ヶ所からは、何人かの紹介メールが、送られて来ていた。それは、秀明が両親と私の実家に結婚の挨拶に来るまで続いた。成約脱退金十二万円の振り込みが、プロポーズだったのか。

秀明からの言葉では無く、秀明のこの行動で、私は結婚を決めた。私は十二万円で自分の過去を捨てた女。結婚はその一ヶ月後だった。

「凜さん、今日もう帰っていいわよ」

託児所の先輩、雪が笑顔で言う。

「えっ、いいですよ、五時まで居ます」

「いいから、新婚さん、なんだから。早く帰って旦那さんに美味しい物、作ったら」

何故か、気持ち弾まない私は話を続ける事も嫌だったので、

「ありがとうございます」

と、言って職場を出た。

職場と言っても、アパートの二階にある小さな託児所。階段を下り、この街では有名な、お菓子屋の隣にある駐車場へ向かう。

時間は午後二時。

車の窓を開け、この後の行動を考える。アパートに帰り、秀明の為に新妻らしく夕飯を作る気持ちにはなれなかった。今日は残業で夕飯は食べない、と言われた事もある。それより料理は苦手で嫌いだ。料理の出来る旦那さんが希望と考えていた時もあったが、秀明はそうではない。遅くなると言う秀明に、「新婚なのに」と、少し嫌みを含み言ってみようと考えたが、大人しく言葉を飲み込んだ。

携帯を見るとメールの着信。心が騒ぎ、期待して、受信ボックスを開いた瞬間、少しガツカリ。いや、少しでは無く気持ちが落ち込む程、寂しい気持ちになった。「どうして・・・」

メールは昨日も披露宴に出席してくれた親友、弓からのメール。

《From 高橋弓》

《Sub 驚見凜へ》

「おまえもついに結婚したな、嘘みたい。昨日の写真送るね。でも、凜がこんな急に結婚するなんてまだ信じられない・・・なんで私にブーケ投げなかった。プンプンプーン」

弓は康太郎の事も知っている。

「だって、弓はもう二人の子持ち。二度目がしたいの」私は弓からのメールに、そんな事を考えた。

でも、「弓に放れば良かったかな」と、思い添付の写真を開いた。
白いバラとジャスミンのブーケ。

教会前、ブーケを左手に秀明と腕を組み、赤レンガの上を歩いている写真。秀明の笑顔は写っているが、私は下を向いて表情は見えない。「どんな顔をしていたのだろう。人生最高の日に」私は写真を見る限り、本当に嬉しそうな雰囲気、自分の姿からは感じ取れなかった。「どうして・・・」

弓からの写真を保存し、自然に新規メール作成を開いた。

《To 凜》

《Sub 康多朗》

Fw:ご報告

7/1入籍しました。写真添付。

添付の写真は今届いた教会前の写真。深紅のバラの花びらが時かれ、雨の中を歩いている。顔が見えないから、これがいい。笑顔を康多朗に見せる事を、躊躇した。

「送信」

午後二時半。

返信はいつもの感覚で、直ぐにある筈。どんな時も康太朗の返信は早い。私はそれだけで、愛されている自信となった。

だが、私の期待は裏切られた。「なんでこんな事をしているのだろう。そうだよ、康多朗は私のウェディング姿見たいと言って居たし、別に深い意味なんか無いし・・・」小さく心の中で呟く。

この時、私はこのメールで康多朗を悲しませ、自分も辛い思いをするとは、考えが及ばなかった。

夕飯の買い物で、秀明の勤務するスーパーに寄った。背の高い秀明は直ぐに見つける事が出来たが、声を掛ける事を躊躇った。ビールとつまみを籠に入れ、レジに並んだ。レジの三十代の女性も披露宴の出席者の一人に思えたが、私が一昨日の花嫁と気付く事も無く、ただ淡々と自分の仕事をしているだけ。「一昨日の花嫁、なんだけ

ど・・・」私を見て声を掛けて来ると思ったので少し落胆し、缶ビールとジャーキーを袋に詰めた。

そうだよ、ね、「結婚式は付き合いで仕方無く出席するだけ、私の顔なんて覚えていない」そう思って出口に向かい歩き出すと、背後に視線を感じ振り返った。しかし、誰が私を見ていたのか確認は出来ない。確かに誰かの視線を感じた私は、「思い過ごしかな」と思い、再度振り返り見廻したが、誰も居ない。秀明の姿も見えない。レジには会計待ちの客が「早くしろ」そんな顔で並んでいた。

秀明はまだ帰宅しない。午後十一時を過ぎている。「新婚なのに」そう思いタバコに火を着け、吸い過ぎと自覚した。

秀明が帰宅する前に、風呂に入ろうと立った。ヘビロテデザインのシャツワンピースを脱いだ時、携帯が青く点滅しメール着信を確認する。今度は絶対に康太郎と願う気持ちで携帯を見詰めた。

どきどきしている心臓に少し驚いた。それは昼に送信したメールの返信が遅く、どう返されるか心待ちしている私の正直な気持ち。「ただの入籍報告メールの」。それだけでは無く、いろんな言葉が欲しかった。本当は期待してはいけない、康多朗からのメール。

最愛の人からのラブレターを何年も待つ様な切ない気持ちに、私はもう気が付いている。

嬉しさいっぱいで、受信ボックスを開いた。

《From 康多朗》

《Sub 凜へ》

《祝電も誕生日のお祝いメールも気持ちが沈んで無理でした。忘れよう、忘れようとすればするほど、今までの事が昨日の様に鮮明によみがえり、また落ち込んで・・・改めて凜の存在の大きさを思い知らされています。》

今日の朝刊で入籍した事を知りました。

ここ一ヶ月、外出せず、する気持ちにもなれず、部屋で読書をし、

静かに心のリハビリをしています。

故に、就職活動もせず、未だ無職。自分がこうなるなんて考えても居ませんでした。

でも、仕事を辞めた事は後悔して居ないし、出来ません。何となく、少し自分が変われるのでは、と思つて居ます。

テレビもラジオも無い静かな部屋で時間を潰し、何も考える事も無く、眠くなるまで読書をして居ます。携帯も鳴らないので、曜日の感覚も無くなつてしまいました。鏡も暫く見て居ませんが、白髪も増えたと思います。短くなつていく時間と、最近ではもうどうでも良くなつた体重を、少し戻したいと思つて居ます。

もう凜の知つて居るメタボな私ではありません。おそらく体重は凜と同じ位だと思います。もう何もして居ませんが、自然に減つていきます。今は少し戻そうとして居るのですが・・・

暫く連絡、控えてくれるといいかも知れない・・・

あれからずつと我慢して居るのが辛くて、いつも負けそうになつていたので・・・（地震の時は我慢できず連絡したが。）

凜の幸せを願っているのに、今の凜の幸せを素直に喜べない私がここにいます。毎日凜の声を聞きたくて我慢している私がここにいます。いつも凜の幸せを願っているのに。

お父さんの具合気になっていきます。優しくしてあげて下さい。安さんのお墓参りできて良かったと思いますが（白い花、枯れていたかな）一週間違つたのを後で知りました。でも母の日だったので、許されるでしょうね。

健康に注意して、元気な赤ちゃんが授かる事を願っています。

メールの写真はちょっと辛いな、暫く立ち直れないかも。

凜に子供が出来たら連絡下さい。困った事があつたら直ぐに飛んで行くけど、旦那さんが傍に居るので、その可能性も必要性も無いです。元気でいつまでも可愛い凜で居て下さい。私の中で凜が本当に大切な人だと今、改めて噛みしめて居ます。》

涙が頬を伝って落ちる。康多朗に対して辛い行動を取った自分を、まだ大切に、嫌わずに居てくれる事が嬉しく、涙は止まらない。

テレビでは東北自動車道の全線開通と、大物俳優の入院、そして巨人新監督の初優勝、今日か明日かと騒いでいる。

鷹見凜、十九歳。保母専門学校二年生。

今、自車校に通い、第二段階で既に三時間の追試。「どうしようか、止めようかな。でも免許は必要だし・・・」下宿のコタツの上に、まだ未提出の夏休みの課題を広げ、これからどうするか考えて居た。「気持ちが暗い」原因は夏休みの課題でも、自車校の事でも無い。

「凜先輩、お風呂いいそうです」

下宿の二階、隣の住人加奈から声が掛かる。

「加奈ちゃん先にいいよ」

「え、いいの？」

「どうぞ」

今日は風呂に入る気分では到底無い。

もう直ぐ専門学校の学祭があり、私は今日のクラスの打ち合わせで、クラス行事の責任者にされてしまった事もある。

美保も、好恵も、

「いいから、いいから、凜、頑張って」

と、人ごとだと思つて笑つた。

自車校の追試もある。夏休みの課題の絵本も未完成だ。本当に、体も心も重く感じた。

でも、本当に気持ちが沈んでいるのは別の理由。不安な気持ちを抑え、コタツの製作途中の絵本を眺めて居たが、限界だった。

二ヶ月間の夏休みで、課題は絵本一冊を完成させて提出する事。さすがに保母専門学校、楽勝と考えて居たが、いざ製作段階に入ると、中々進まない。書きたいストーリーも絵も、頭の中には浮かんでいない。素敵な恋の物語を書いてみたい。

でも、最後の結末がどうしても・・・悲しくなる。

「ある日、森のクマさんの家に、迷子のリスがやって来る。一人で寂しかったクマさんは嬉しくなり、リスの世話を始める。しかし、リスは何も言わず、いつ帰るとも言わない。一人寂しかったクマさんは、リスが居なくなるのが心配でも何も言えなくなる。そのうち森のコウモリからリスの話を聞いたクマさんは、どうしたらいいのか分からず、ただリスの世話をする」

コウモリから聞いた話は、

「リスが森の木の実を全て食べ尽くしてしまい、森が無くなるよ。クマさんもここに住んで居たかったら、森が無くならない様に、早くリスを他所の森へ行く様に説得して・・・」
森の仲間達がクマさんに期待していると・・・

春に経験した私の恋。相手は三歳上の社会人。

今はもう終わった。私から振った。そう決心している。

辛い、思い出したくもない恋を美化し、理想を思い並べた物語。

私の傑作。恋する気持ちを相手に上手く伝えられず、只ひたすら相手の為に尽くす。恋する心の不安と葛藤が題材。

勿論、私の実体験が含まれているが、それはほんの一部で、あとは全て想像と憧れ、希望と理想の世界。

まだ素敵と思える恋愛を私は経験出来ないで居る。

故に、その続きが書けない。最後の結末が見えない。

加奈が風呂から上がって来た。

「凜先輩、お風呂どうぞ」

「うん、ありがとう」

返事はしたが、風呂に入るつもりは無い。下宿なので、風呂は大家の内風呂を頂く。何となく部屋に居るのが嫌で外に出ようと階段を降りた。風呂道具は持っていない。

「今日風邪ぎみなので、お風呂いいです」

大家の奥さんに声を掛け外に出た。

「鷹見さん大丈夫？」

と、言う奥さんの声が聞こえたが、その時には既に玄関を離れていた。「鷹見さん」ここの大家は下の名前で呼ばない。普通は一年以上も下宿して居れば、そうで無くても女の子なので、「凜ちゃん」とか、「凜さん」と呼ばれると思つて居たが、未だに鷹見。下宿生は高校生一人と専門学校生三名。全員女子だが、名前で呼ばれるのは専門学校一年の中野綾子だけだった。彼女は一階の下宿人で、顔を合わすのは、食事の時だけだが、「アヤちゃん」と呼ぶ奥さんの声を何度か聞いた。その時はどうして彼女だけ、と不思議に思つたが、後で大家の姪だと知り納得した。

十月なのに薄いタンクトップ一枚で外に居る事に気付いた。部屋に居たまま出たので、いつもの様にブラも着けて居ない。暗いし、いかな。戻るのも面倒だ。それに、寒さはそれ程でもない。

康太郎と初めて会つたのは、そんな十月の夜だった。

下宿を出て、近く公衆電話。市役所の前庭の隅にそこだけ明るく、青く、中の電灯が光っている。寒いのか、飛んでいる虫も少ない様な気がする。康太郎は電話ボックスで話をしている。私の方を見るも、まだ電話は続いている。

五分位経過し、実際はもつと長く感じたが、電話が終わり中から扉を押して出て来た。私が待つていると思つたのか、チラッとパーゴラのある花壇に腰を下ろす私の方を何気なく見た。そして、近くのベンチまで行きタバコを吸い始めた。私に氣を使つたのだ。

それから、どの位時間が経過したであらう。おそらく一、二分。まだ康太郎が私を見た様な気がした。実際には暗くて康太郎の表情など分からないが、そんな氣配を感じた。私はゆっくり立ち上がり、康太郎の座つて居るベンチに向かった。

「あのう・・・」

電話を掛けに電話ボックスに行くと考えて居たのか、少し驚いて、
「何・・・」

と、季節に合わないタンクトップ一枚の私を足下からゆっくり見上げた。薄いタンクトップ一枚の私に驚いて居るのだろう。驚いた表情でもう一度、足下からゆっくり見上げた。そして私の顔をじっと見詰めた。あまりの薄着だから、微妙な気分になって居るのか。

「あのう・・・」

「何・・・」

さつきと同じ会話。

「たばこ一本下さい」

康太郎は何も言わず、ワイシャツの胸ポケットからハイライトを箱ごと私に渡す。右手に持っていたタバコを咥え直し、ライターもズボンの右ポケットから私に渡した。オイルライターだ。上手く点火出来ない私を見て、無言でライターを取り、火を着け、ズボンのポケットに戻した。タバコの箱を返そうとすると、私の顔を見て、

「電話いいの」

と、私にテレフォンカードを差し出す。

「いいんです」

と、私が言つと体も私に向け、右手に持っていたタバコを咥え、立ち上がり背広の上着を私の肩から掛けてくれた。柔らかい暖かさと上着から微かに漂う柑橘系の香りに私は「ドキッ」とした。

タバコは去年の夏頃から吸い出した。専門学校に入学し三ヶ月位過ぎた頃、寂しくて、自然に手を出したのが始まり。康太郎はその後、私が何故電話を掛けないのか聞かなかった。その時、電話を掛けて居たら、その後の展開は変わって居たのかも知れない。

「今頃こんな所で・・・何」

と、言い掛けて康太郎は言葉を止めた。「何をしに」と、聞きそうになり、電話を掛けに来たのだと判断したのだろう。私も沈黙。
「・・・」

今頃になり、私は以外に外は寒いと感じた。でも我慢できない寒さ

ではない。

タバコを吸い終わると、前屈みとなり膝をさすった。康太朗の上着から微かに匂うコロンの香りが気持ちを落ち着かせる。オイルライターからも同じ匂いがして居た。夜のこの時間に全く知らない男性と暗いベンチに座って居ても、不思議と不安は感じ無かった。

そこで私は、今日は風呂に入って無い事を思い出し、肩に掛けられた上着に、汗の匂いが移らないかと、恥ずかしく思った。

「いい香り」

「サルバドール・ダリ」

「えっ、」

「コロンの名前」

「・・・・・・」

私はそこで何を言えば良いのか、声が出なかった。まだ学生の私にはコロンの興味があっても、名前など知っている筈も無く、知識も無かった。それに、必要性もあまり感じて居なかった。隣に座って居るまだ何も知らない初対面の康太朗が、自分とは住む世界が違う大人に見えた。

この時、康太朗は三十八歳だった。

「どこ行く」

「えっ、」

驚いて康太朗の顔を見ると、

「夜の誰も居ない公園で、君は電話を掛けず僕に声を掛けた。帰る様子も見せずに隣に座って居る。初対面なのに。君は可愛いし、男だったら、誘うのが礼儀。かな」

「私可愛くないです。だから・・・」
と、言い掛けて止めた。

「可愛いよ、それに色っぽい」

康太朗が私を見て初めて少し表情を崩した。至近距離五十センチ。

「そんな、見ないで下さい」

「えっ、でもこんな可愛い子がこんな時間に、こんな暗い所で・・・」

こんな時間で無くても、そんな色っぽい格好して居たら、男なら誰でも見てしまうと思うけどなあ。じいさん、でも」

「じいさんでも？」

「冗談、冗談。でも、夜で良かったかも。明るい所だったらきつと、周りが恥ずかしくなる。かな」

確かに薄手のタンクトップ一枚だけど、中は見えない筈。「あつ、」ブラを着けて居ない事を忘れていた。今また気付き、寒そうに膝を抱える様な姿勢で、自分の気持ちを隠そうとした。さっき、見えて居たのかも知れない。康太郎が上着を掛けてくれる為に立ち上がった時、「見られた」と、思った。タンクトップはダブダブのヒップホップ調だった。上からは完全に見えて居ただろう。

その後康太郎は私が寒いだろうと心配し、お茶でも行こうかと誘ってくれたが、私は自分の格好を考え、何処にも行けないと首を振った。まだ会ってほんの短い時間だったが、私は康太郎に対して、危険な匂いを感じてない。それどころか、父親に感じると思う安心感を、何故か康太郎に感じて居た。

私は父に対して、そんな気持ちを感じた事は無かった。それに、父親を良くは思っ居なかつた。「どうしてだろう」おそらくそれは、母から聞いた話が、原因だと自分では思う。

私には晶子と真子の二人の歳の離れた姉が居る。年が離れて居るので、姉達に世話をされ、育てられたと言っても過言では無い。

次女は私より十二歳、長女の晶子は十八歳も年上だ。

ある時母が、

「凜、私ね、三人目の凜が生まれた時本当に嬉しかったのよ。実はね、真子が難産で苦労したの。それに小さくて保育器にも入ったのよ。でもそれだけではなくて、私の体も大変だったの。だから出産前は一ヶ月も病院に居たの。それでも真子は無事に生まれたわ。でも私はその後二ヶ月も入院したの。実はね、心臓がちょっと悪かったの。今はもう大丈夫だけどね。お父さんは私の体を心配して真子を諦めようとしたの。でも、私は産みたかったのよ。でね、・・・」

その後、母は全てを言わなかったが、

「でね、もう子供は出来ないうちで死んだの。だから凜がお腹にいると知った時、本当に嬉しかったわ。お父さんは怒ったけどね。本当はもう子供が出来ないと、病院の先生にも言われていたの。だからビックリして、本当に嬉しかったの・・・」

「どうして、産んでくれたの、お母さん体だつて・・・」
と、言い掛けて、それ以上私は母に何も言えなかった。

その話を晶子にすると、私をもう大人だと認めてくれたのか、少しだけ話してくれた。

「凜、怒らないで聞いてね。母さんが凜を妊娠した時、私も真子も母さんと喜んだわ。でも父さんは違ったの。母さんの体の心配もあったと思うけど、この歳になって恥ずかしいと言って、母さんを随分責めたの。病院の先生には、もう出来ないって言われていたらしいけど。それに母さん、四十後半だったからね・・・」

晶子もそれ以上詳しくは話さなかった。父は強く母を責めたが、母の熱意に出産を許した。しかし、父は私が生まれて母もまだ入院中に、今の家に引っ越しをしたとの事。

その後暫く酒浸りとなり、私が幼い頃も母に向かって、「酒飲んで間違つて、できた子なんか可愛くない」と母を虐めたと知った。

あれから十五年、波瀾万丈な康太郎との愛は、最近まで続いた。

あの夜電話ボックスで会ってから、康太郎との話は続き、最後は泣きながら、私は自分の気持ちで沈んだ原因を康太郎に話した。

専門学校に入学して初めて大人の恋愛。社会人の三歳年上の男との喧嘩別れ。別れた後になつて私が妊娠している事を知り、男に告げたが相手にされず、どうしたら良いか判らず困つて居る事。

親にも言えない事を康太郎に打ち明けた。康太郎は無言で、最後まで私の肩を優しく抱き、話を聞いてくれた。

その後、康太郎は子供の父親として、私を病院へ連れて行つてくれ

た。仕事を休み、付き添ってもくれた。どうしてあの時初対面の康太郎に全てを話したのか、今でも不思議に思う。誰にも相談出来ないと考えて、話しをしたのだと思うが、とても安心した事を覚えている。

今も康太郎に感謝している。

その後、私の気持ちが康太郎に向いたのは自然だった。

康太郎には奥さんも家族もあったが、それでも私は康太郎と離れたく無かった。自分では割り切って付き合っているつもりで居た。私にとって康太郎は恋人であり、保護者であり、優しい父の様な離れられない存在となった。不倫と言う言葉は存在しなかった。たとえ今、秀明と結婚しても、離れる事も忘れる事も出来ない。

私はもう十分に康太郎から幸せを貰った。康太郎を苦しめない為に私は康太郎と別れる事を決めた。それが良いと思えた。離れられないのは自分でも分かって居たのに。そう決心しなければならなかった。康太郎から一緒になろうと言われた。本当にそれが可能なら、親も友達も、全てを失っても良いと思っただが、自分に置き換え、康太郎の家族の事を考えると、別れなくてはいけないと思った。今まで私に優しく暖かく接してくれた、せめてもの康太郎への愛。

康太郎を私の事で苦しめて居るのが辛く、どうにかしたかった。私は結婚相談所に申し込んだ。そうするしか無かった。康太郎は私が結婚相談所の出会いパーティーに行く時、送り迎えをしてくれた事もあった。どんな気持ちだったのだろう。自分だったら耐えられないと思うが、私の依頼に嫌な顔もせず、話も最後まで聞いてくれた。私は随分と康太郎を最後まで困らせたのかも知れない。

十五年の二人の時間が全てを包み、康太郎が私のこれから一緒に生きて行く人だと、もう何年も前からそう望んでいた。

私の全ては康太郎のもの。康太郎も私の事を大切に思ってくれている事は十分理解している。もう康太郎に話せない事は何も無い。ただ一つを残して。

二人で街を歩くと、最近では「ご夫婦ですか」と自然に聞かれる。十八歳も離れていても、長く深く愛し合っていると、自然にそう見えるのであるうか。私は嬉しくて自然に笑ってしまう。

康太郎はよく、

「凜はもう空気がなくなっただな」

と、優しく私と手を繋いだ。私の喜ぶ事をよく知っている。

いつまでも、いつまでもこのままずっと、もう康太郎の手は離せない。離したくない。

いつもそう思っていた。

私が秀明と出会って一ヶ月が過ぎた頃、秀明との結婚を決意した事を康太郎に打ち明けた。何も言わず、寂しそうに、悔しそうにしていたのを今でも鮮明に覚えている。

そんな時だった。康太郎に転勤の内示があった。話を聞いた私は何も言えなかった。康太郎と別れる事を宣言し、結婚も近い私に康太郎に言える事は何も無い。転勤先は遠く、行ってしまうば、もう二度と会うことは出来ず、二人の完全な別れを意味していた。

一緒に行きたい、そう思った。

康太郎の仕事も忙しく、久し振りに会った時に康太郎の話を聞いて私は本当に何も言えなくなった。

森のクマさんの様に。

「凜、何食べる」

と聞かれたので、いつもの様に、

「美味しいの」

と、微笑み返した私を連れて来たのが、いつもの二人の落ち着ける場所。個室になっている居酒屋。

そこに入っの第一声、

「仕事辞めた・・・」

「えっ、」

私は何も言えなかった。その言葉が意味する事が嬉しくて、涙が流れた。言葉が出ない。康太郎も私に何も言わせない雰囲気だった。

十五年前、電話ボックスで出会った時から、今までの事を私は思い出していた。私には、あつという間の十五年。大切な十五年。

この後もずっと康太郎と一緒に生きて行きたいと思った。

「今でも、凜を苦しめて本当悪いと思っっているよ。凜の気持ちはよく分かってるし・・・俺が馬鹿だったよな。決断遅くて。今回の転勤、もうどうでもよくなつて、辞める事にした。凜と一緒にないけどさ、やっぱり近くから離れられないよ。凜が結婚しても、凜の傍にいたいし・・・凜が離婚するのを、待っている。だから辞めた・・・」

もう何も言うことは無い。

私は幸せで言葉も出ない。

私は席を立ち康太郎の隣に座った。静かに康太郎の唇が重なる。今日も柑橘系の香り。この香りで心が落ち着く。

「飲も」

と、私は康太郎にグラスを差し出す。

いつも私を自宅まで送る為に、康太郎はアルコールを飲まない。けれど今日は、一緒に飲まずには居られなかった。康太郎の腰を強く抱きしめ、私は泣き、自分の涙が涸れるまで飲みたいと思った。

これが康太郎の優しい笑顔を見た最後、三ヶ月前。

日付が変わろうとする頃、ようやく秀明が帰って来た。

「ただいま」

「遅い」

「ごめん」

私は、この人と生きて行く事を大切に考えなくてはいけない。康太郎もそう考え、私と離れようとしてくれたのだと思うと、秀明の事を本当に大切に考えて居るのだろうか、改めて考えた。

でも、康太郎の事は忘れない。忘れなくても良いとも考えている。確かに長い間、愛情を持ち続け最高の恋人だった康太郎。私は康太

朗以外結婚は望まなかった。

しかし今、忘れる努力をするのは当然なのかも知れない。いや忘れなくては秀明に対し失礼とも思うが、もう一人の私がその必要はないと言っている。時間では解決しない。

十九歳から今日まで、康太郎が居なければ私の人生は確実に無かった。私の青春時代の一番素晴らしい時間を、より輝かせてくれた人そんな人を例え誰が何と言おうと忘れる事など不可能。康太郎が居なければ、今の私も存在しない。例え私が死んでも、私の魂は康太郎の中で生き続ける。私は自信を持って今はそう言える。

秀明と結婚してまだ三日目なのに、私の心の中はいつも康太郎が待って居る、という思いは消せない。

「康太郎に会いたい」

私は気持ちを抑える事が出来ない。

お腹の中からそう響いてくる。

康太郎が今でも一人であの観音様にお参りして居る事を、私は知って居る。決まって十月の第二日曜日。

この日だけは毎年会えず、康太郎は一人で何処かに出掛けて居た。私は手帳をいつも手元に置いて、去年の今日は何をして居たのかと確認する習慣があり、それで気が付いてしまった。

そう、十五年前に病院に行った日だ。康太郎はこの日一人で水子供養に行つて居た。知つたのは五年前。康太郎の車で何気なく見つけた入場券で理解した。

「。。。大観音」

私はその事について一言も聞けなかった。一度そこに一緒に行つた事もあつたのに、康太郎は何も言わなかった。

私はその後一人でそこを訪れ、本当に胸が苦しくなった。大きな金色の大観音の台座の下は地下室になっており、観光地であるが、奥まで行く人は少ない。私が一人で行つた日も、私以外誰も居なかった。暗く長い通路を進み、曼陀羅宮を過ぎ、だんだんと明るくなり、

もうすぐ出口と思われたその時のショックは今でも忘れない。
数百体の小さな永代供養された水子位牌が整然と並んであった。
私は夢中で名前を探した。

「あつた・・・」

倉田康太郎 凜

光

私は、そこで体が固まり動けなかった。涙で光の名前が霞み、涙で光の体が濡れた。康太郎が私を誘わず何年も一人で来ていた意味を考えると、今日ここに來た事は康太郎には言えないと思った。

婚姻届けを市役所に出した翌日に、私と秀明の名前は新聞の地方版の慶弔欄に載った。

それから何日が経っただろうか、私は同じ地方版の慶弔欄に「倉田康太郎五十二歳」という名前を見つけ、体を震わせていた。
その時、携帯がコタツの上で震えた。

「康太郎 自宅」と表示されている。

康太郎が私宛に遺書を残した。

今、私のお腹には康太郎との新しい生命が宿っている。

秀明には全てを話し、別れを告げた。

康太郎の好きだった

「アメイジング・グレイス」（賛美歌第二編一六七番）が流れる。

我をも救いし くしき恵

迷いし身も今 立ち帰りぬ

「こんな愚かな私でも、救われるのだろうか」

私はこれから、この子と二人で生きて行く。

「見守っていてね、康太郎」

合掌

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7489h/>

聞きたい言葉

2010年10月28日04時42分発行